
とある田舎にて

ささぐれタロー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある田舎にて

【Nコード】

N6384F

【作者名】

ささぐれタロー

【あらすじ】

オヤヂのふるさとで、俺は初恋の人に出会った。

いきさつ（前書き）

なんだろうのサイドストーリー。
たくあんくんはいらない子。
でも、いる子。

いきさつ

とある田舎にて。

俺は恋に落ちた。別にどうってことはないが。
それが初恋なのだ。

とある田舎にて

「うわあ。」

むんむんする雨の中。

そう、呟いた。

気持ちの悪い日だった。

俺、沢滝涼は山梨県さわたきりょうのとある田舎に引越してきた。

「ああ。むんむんする……」

そういうとオヤヂが運転しながら

「そりゃあ、梅雨だしなあ……っそれに山中だしなあ……」

オヤヂはテレビに出てくるゆつたりゆつたりのつたりしたお父さんにぴった
りだ。

だから喋る言葉もなんか最後が伸びてる。でも、俺はそんなオヤヂ
はいいと思う。

「えー、なに？…山中つてむしむしするんだ……」

「むんむんじゃあ、なくてむしむしするになつてるなあ……」

ゆつたりした声で突っ込んでくる。

「別に、意味変わんないし……」

「んー……そうだなあ……」

そう、ゆつたりと呟いた。

たたん たたん。車は揺れる。ちゃんとされてない道の上をとおつ
て。

たん たたたん たたん。俺は窓にもたれてその音を感じていた。

たたん たたん たたたん たん……

俺ん家はついこの間父子家庭になった。

なぜかというと、母さんが浮気していた男の人と出て行つたのだ。でも、オヤヂは泣く様子も悲しむ様子もなく。

明日から気兼ねなくその男と一緒にくらししていく母さんに微笑んで。

「さよならなあ……」

といっただけだった。それだけなのだ。それだけ……。

そして、オヤヂはその後何を思つたのか。

「引つ越すかあ？」

と言つてきた。俺は矢で心を射抜かれたように驚いた。

何で、引つ越すのだろうか？どこに、引つ越すのだろうか？

「え？……引つ越すつてどこに？」

「俺の実家かなあ……親父の酒屋継いでみようかなあ……でも」

そこまで言つて口元に手をやった。

まあ、今の仕事でも結構収入いいもんなあ。

辞めるなんて勿体ないと思うけどなあ……。

そう思つていた俺とは裏腹にオヤヂは翌月、仕事を辞めたのだった。こうしてこうもあつけなく、うちん家は父子家庭になったのだった。

そして、今にいたる。^{げんご}

オヤヂは考えてることがほんつとイマイチ分からないなあ。

そんなオヤヂが、

「……お前は俺についてきて良かったのかあ？」

とまた俺が一瞬息詰まるほど驚くようなことを笑いながら言つてきた。

前の席のオヤヂの顔は分からないけど、多分。絶対笑つてる。

父さんでいいよ……あんな女についていくより……。

でも、一時でも父さんはあの女を愛していた。

でも、でも。あいつについていくより、父さんの方がよっぽどいい

や。

そんなことを考えながら、オヤチの「お」が出たとき。

声を合わせて、オヤチが

「着いたぞ！ここが俺の故郷だ！」
ふるさと

と、子供のように喜んだ。

うん、なんていうかたんばっかだ。

いきさつ（後書き）

これから、たくあんくん。
ホモへの道まっしぐら。

田園風景（前書き）

どうでもいいけど。

俺んトコは田舎です。

田園風景のド真ん中に家があります。

信じられる？俺はぜったい出たいなw

田園風景

父さんは父さんを辞めて、オヤヂになった。
ちよつと言い難い。今まで、父さんだったし…。

でも、父さんがオヤヂがいいというのなら、オヤヂにしよう。
父さんは、何故オヤヂにしたのだろう…。

やっぱ、父さんは分からない。

そんなことを思いながら自分の荷物を父さんの実家の二階の自分の部屋になるであろう場所に運んでいた。

月曜日からもう学校かあ…。

ふうと息をついた。ドアの前にダンボールを置いてドアをあけた。
何もない、殺風景な場所だった。

初登校の朝。

俺は、緊張していた。どんな人たちがいるのだろう。

期待と不安が身体中を駆け巡っている。

そのため、朝飯もロクにのどを通らなかった。

とりあえず座ってるだけじゃダメなので、服をパジャマから着替えた。

歯磨きをして、暫く扇風機にあたり靴かばんを持って玄関に向かった。

そして、ガラガラと引き戸を開け、

「行ってきます」

と一言呟いた。引き戸を閉めるか、閉めないかのところで「行ってらっしゃい」と聞こえた気がする。

昨日覚えた道を歩いている。意外と近くだった。

田園風景のど真ん中を歩きながら思った。他に今登校中の生徒はいないのだろうか？

今から行く学校は、過疎地だから小・中一貫らしい。

本当に田舎なんだなと。昨日見たときは学校全然小さかった。

…とゆうか、横に長い。初めて見た形だ。

そして、改めて見てみると。やっぱり横に長い。

校門を入ると、教頭先生みたいな人に。

「ああ、君。転校生の沢滝涼くん？」

なんかオカマ口調で聞いてきた。

「え…ああ…はい…」

「よかったあ。いつ来るのか心配してたのよあ？」

違った。オカマ口調ではなくリアルだった。

「さあ、こっちに来てえ」

と、職員室に連れてかれた。

そしてソファに座らされた。そして、初めて会ったときから思ってた疑問を言った。

「あの…誰っすか？」

俺がそう聞くと、素っ頓狂な顔をした。

「え？…あ、ああそうよねっ！私はこの学校の教頭の高澤です。」

よろしくね！…ええと、あなたのクラスは…って言っても一クラスしかないんだけどね…」

そしてこの学校の説明を受けた。

「まあ、クラスの子達とや自分でどこに何があるのか憶えていってね…じゃあ、担任の山口先生やまぐちについていくといいわ。山口先生…」

「ああ。はい」と答えたのはガタイのいい、若そうな先生だった。

それ…鍛えてんの？そう思っていると「ついてきなさい」と誘導された。

「じゃあねー」

高澤先生はドアが閉まる前に言った。

間違いない、高澤先生は山口先生にゾッコンだ。目がハートだった。

「気持ちの悪い先生だろう？」

そう、いきなり言われた俺は戸惑いながらもうなずいた。

どうやらそのゾッコンに山口先生は参っているらしい。
先生は若いのに少し、顔がくたびれていた。

田園風景（後書き）

オカマきもい。

山口先生に抱かれない（、旦那*）

猿轡（前書き）

甲州弁担当はネットで知り合った今をときめく山梨のギャル。
正直、全く面識のない僕ちに甲州弁を教えてくれるこの子。しろ
たんは、とてもとてもいい子だと思います！

猿轡

担任の山口先生について行き、クラスの前まで来た。

俺が緊張して息を揃えている横で何食わぬ顔で先生は扉を開け、
「おーっす！お前らー席付けやー…そーや、今日は新しい生徒がくるでー」

と、言った。誰がいるのだろーという緊張より、先生が関西弁なことに目が点になった。

先生は山梨の人じゃないらしい。でも、そのお陰で緊張が少し解れた。
た。

「ほい。おいでー……えーっと…転校してきた…なんちゅうん？」
俺はたじたじになりながらも足を動かした。少し震えている。

え？…なんちゅうん？……ってなに？

俺が戸惑っていて、時間が過ぎて空気が重くなったとき先生はやつと気づいた。

「ん？……ああっ！すまんすまん。名前はなん？」

訂正をしてくれたが、それでも微妙に分かり難かった。

「あ……えと、沢滝涼です。…んと、よろしく」

「はいっ！ありがとー。んじゃ、その雨宮あめみやん隣座ってや。はいっ。
じゃあ、朝の会はじめよ。」

俺は改めて前を向いた。男子が2人と女子が4人。

そして、アメミヤという奴を見た。

その瞬間。身体が一気に火照った。胸の奥から熱いものがこみ上げてくる。

なんと、そのアメミヤは俺が恋をした、一之瀬郁人いちのせいくとに似ている。
いや、そっくり……いや、一之瀬郁人そのものだった。髪型さえも
一緒だったのだ。

そう、転校したことで叶わぬ初恋が元通りになった。

俺は、アメミヤと言う奴に恋をした。いや、一之瀬郁人にまた、恋をした。

俺が固まっていると少し横暴な風が吹いて俺の身体を少し揺らした。そこでハッと我に返った。

中学一年生の時、あいつを初めて見た感覚がよみがえった。

俺は、一歩前に出た。そして震える足を無理に動かして自分の席の隣に来た。

すると

「ねえ…俺は、あめみやゆう雨宮悠つて言うんだ。よろしく」

また、止まりそうになった。声までソックリ。いや、そのもの。

アメミヤユウっていうんだ……。

「あ……ああ……よろしく。な……」

「えへ。じゃあ、涼って呼んでいいいけ？俺んこと悠でええし……な？」

えへ。だって……かわいい……うわあ。会って5分も経ってない奴のこと可愛いつて……。

いくら似てるからって……。でも、そのものだもんな……郁人そのものだもんな……。

それよりも

「……け？」

の方が気になった。

「うん？ああ、方言やよ……じゃなくて、ここの方言だよ。何々けつて言うんだ」

ギクシヤクした標準語で話してくれた。

あまりにギクシヤクしすぎていたので思わず頬が上がってしまった。

「……いいかもしれないっ……」

と、悠が意味深な言葉いみじんを言った。

「沢滝……。どうでもええけど、はよ席つけやー」

先生に言われて、あわてて座った。

2時間目の体育。体操着がない。

俺が体操着がなくてどうしようかと悩んでいると、横から声が聞こえた。

「ん？…どしたの？」

「…えと。誰？」

「なに？…え、あ、うち？…うちは高畑愛よろしく…たかはたけあい…んで、どしたの？」

タカバタケ、アイ。

「え…ああ、体操服がないんだ…」

「まじで？」

声の主は悠だった。なんか、さっきからおかしい…。
どうして、悠が？

「愛…行くよ…」

他の女子が高畑を呼んだ。

「あ、う…んっ。待って…じゃねっ。沢滝くんっ」

それだけ言い残すと足早に名前を呼んだ女子のところに行った。
結局体操着のことが解決してない。

「涼！」

いきなり叫ばれてビクツとした。もう一人の男子もビククリしている。

「…だから、何？さっきから変だ。」

「こっち来てっ！」

無理矢理手を引っ張られた。どこに行くのだろう…。

何故、驚かないって？郁人で慣れっこだからな。

そう言えば、あいつもよく人巻き込んでたよなあ…

まあ、理由はいつも、体操着忘れて職員室に行くだけだな。
とか思い出してニヤけてたら。どこかへ着いた。

「あ…授業は？」

「別にっ…別にいいじゃんっ」

そう首を振った。髪がサラサラしている。綺麗だ。

「あの…あつ…つかつここどこ？」

「どこでもいいのっ！……あとで分かるからいいじゃんっ」

あとで分かるって…。なんか、和室っぽい。畳みだし…障子貼ってるし…。

「つか…和室？」

「どーでもいいのっ」

つか、重いんですけど。騎乗位って…いや、でも腹の上だから…。

つか、騎乗位かあ…。

やべっ……勃^たって…。

「うわあ…。けっこ筋肉ついてる」

片言な標準語だ…。だけど、行動は全くと言っていい程正反对だ。

何でこんなに慣れてるんだ。疑問が浮かんだ。もしかして……と、変な想像が過ぎ^よった。裸で小太りした中年の親父と悠の姿…そして、ソウユウコトをしている風景。

でも、こんな田舎ではないだろう。と、そんな想像を考えるのはやめにして、それにしても。

裸にされてる。隠喩ではなく直喩ではなく、そのままの意味で。

「あのねえ…あのね……なんかね、好きになっただけ…かも…」

驚いた。とてもとても驚いた。その言葉を聞いただけですごくばくばくしていた心臓がその2倍にも3倍にも動いている。

悠はそう言つと、体操着の上を脱いだ。

そして、俺の口に含ませた。

「…え、え…えっちしちよ……」

山梨の方言でそういった。すごく可愛かった。

でも、そんなことよりも、猿轡^{やゐりつわ}の方がは苦しい。

猿轡（後書き）

習ったのはいいけど。

とてもにわかwwwwwwww

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6384f/>

とある田舎にて

2010年10月21日23時02分発行